

2016年1月10日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉

聖書：創世記2：1－3

タイトル：『祝福して聖とする』

---

神は第一日の「光があれ」という言葉による創造から始め、水と大空、大地を分け、またすべての植物、太陽や月星、空の鳥や、海の中の生き物、陸地の生き物などを創造された。そして創造のクライマックスである私達人間を創造された。

創1：31には、「それは、非常によかった」と記されている。

この言葉は、本当に素晴らしい、完璧な世界であったということである。完全、完璧な世界を神は創造され、それをご覧になり、満足されたのである。

本日の箇所である創世記2：1－3の箇所は、こうした出来事の後記されている。

これは神が、先の創造の6日間の中で創造したすべての被造物が、この7日目向かって、創造されているということを教えている。

この7日目には、これまでの創造の6日間とは違い、「夕があり、朝があった。」という言葉がない。つまり、この第7日目の御業は、今日に至っても、そして未来に至るまでも、この創造の第7日目の時から永続的に続いているのである。ヘブル書4：4、9でも、著者は、この創世記の箇所を引用し、新約時代に至ってもこの創造の7日目のことは有効であると記している。このように7日目の御業というのは、永続的なのである。

また、創世記の2：2の最後と3節の最後の方で「休まれた」という言葉があるが、原文のヘブル語では「シャバット」という単語で、直訳では「やめる、休む」という意味の言葉である。これは聖書の中で何度も「安息・安息日」と訳されている言葉で、出エジプト20：8－11でも同じように「安息」と訳している。新共同訳はこの創世記2:2-3の言葉をいずれも「安息」と訳している。この様に、創世記の2：2-3節に記されている「休まれた」という言葉は、「安息」したと言い換えることが出来る言葉である。つまり、7日目の休まれたというのは、実際的な意味としては創造の働きから「安息」した。ということである。

さらに創世記2:2-3をよく読むと、「神は創造の御業を安息したので、7日目を祝福し、聖である。」とされたということだが、これは、創造の御業というものが完成し、その創造の働きから「安息」したということであって、神はこれ以後働きも何もしないでずっと休憩しているということではない。

また、ここに記されている「聖であるとされた」とは、「聖別する、区別する」という意味だが、他に言い換えれば「特別」と言える。

この様に「安息」とは、「神ご自身が創造の御業の完璧な完成を喜び、そして祝福するために、その創造の働きをやめて安息し、聖めて特別な日とした。」ということである。神はそのようにこの7日目を、永遠の安息として定められたのである。

私たち被造物にとっては、神の御業によって与えられた恵みに感謝する時であり、またその恵みをくださった神を褒め称える特別な日として、一切の働きをやめて安息することが許されている。また招かれているのである。これはなんと素晴らしいことであろうか。

しかし、そのような安息が許され、招かれていながら、私たちは、その安息という特別な日を過ごすことが出来なくなっていることがある。それは、この安息が人類の中に罪がまだ入っていない（罪を犯す前

の) 時に定められたものでありながらも、私達の現実は罪の奴隷となってこの世に生きていたために、この安息を巡っては、未だにこの世の常識と神の教えとの間に戦いがあるからである。

ローマ 6:16-18 には次のように記されている。

「6:16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。 6:17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、 6:18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」

またローマ 12:2 にもこのように記されている。

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことと、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

私達は今どのような歩みをしているだろうか。神の定められた永遠の安息を守り歩んでいるだろうか。そのことを一人一人が、吟味していきたい。

ローマ 11:22 にはこのようにも記されている。

「見てごらんください。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。」

私達は、この「安息」がどれほど素晴らしい祝福であるのかが、わからないということはないだろうか。安息の、『祝福して聖とする』中に憩わせていただきたい。